2019.11.10　年間第３２主日

霊による復活

ルカ 20 章 27-38 節

さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。次男、三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

説教

キリスト教の暦では一年の終わりに近づいています。11 月 10、17、24 日の３回の主日は伝統的に「終末主日」と呼ばれ「終わり」について思う時としています。きょうの福音は復活についてのサドカイ派とイエスの問答です。エルサレムに到着したイエスは神殿で活動を始め、当時の宗教的指導者たちと論争しました。

　サドカイ派の人々は復活は律法に矛盾するからありえないといいます。七人の夫に死に別れ、その都度七人の兄弟たちと再婚した女性を例にあげます。

復活した女はいったい誰の夫になるのか、同じく復活した七人の夫を前に女はどうするのか、どうなるのか、とサドカイ派は主張します。たしかに、復活したら愛する人に再会できるという希望があります。また愛する人を失った人の慰めは、いずれ自分も死に、そして復活して再会できる慰めがあります。それはこの世の人間関係や社会関係が復活のあとも続くことが前提となっています。しかし、イエスは死者の復活する世はこの世の続きではないとはっきりと否定します。

イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない」ルカ 20:34-35

　私はときどき同窓会に出かけます。わたしが好んで出席するのは少人数の同窓会です。仲の良かった者同士の会合で嫌いだった人や、いやな人がいない、こじんまりとした集まりです。一方で大きな集まり、誰彼も集まる同窓会もあります。同じ年に卒業したどうしの集まりです。この集まりにはよほどの義理がないと（わたしの場合は仲良しが幹事しているので断れないという理由）出席しません。

復活論争を読んでいて「同窓会の出欠の返事」に似ていると感じました。七人の夫をもつ女は天国で困るだろうといっているサドカイ派と、嫌な人に会うから同窓会に出たくないとおもう私の気持ちは似ています。サドカイ派も同窓会の出欠にとまどうわたしもどっちもどっちです。神さまからみればとうてい合格には及びません。

この人たちは、もはや死ぬことがない。ルカ 20:36a

　イエスさまは死んだ人はもう死なないと断言します。そしてそれに続いてこうおっしゃいます。

天使に等しい者であり復活にあずかる者として神の子だからである。ルカ 20:36b

人はみな死にます。そして天国にいきます。天国にはいままで地上で生き、そして死んだすべてがあります。天の国には死はありません。神の子とされ、

復活を待ち望みます。

神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。ルカ 20:38

このみことばは私たち一人ひとりにとっての励ましのことばです。復活のイエスは生死を超えたところからいまを「生きよ」と力強く呼び掛けてくださいます。